

アカペラコンサート・ワークショップによる被災者コミュニティの結束力の創出

環境情報学部4年 富永真之介

■活動内容

・主な活動

①仮設住宅でのアカペラコンサート

7月末に完成した避難住民のための仮設住宅でアカペラコンサートを実施。仮設住宅には全島民の約半数が生活しており、共用スペースとして談話室が設置されている。今回はその談話室を使用して11曲のアカペラ演奏を行った。12名の島民の方がいらして、涙を流される方も多かった。

②屋久島ベースでのアカペラコンサート

屋久島ベースは、「ワクワクする居場所作りをテーマに地元の子供たちや移住者など幅広い年代の方々が集まる秘密基地のような古民家」で「宮之浦青年団長の竹之内さんが運営」している。島民の約半数は仮設住宅ではなく空き家提供のあった住宅に暮らしており、その方々を招待してコンサートを開催。35名が来場。その後、懇親会を開き、日頃離れて避難生活をしている口永良部島島民同士が交流する機会となった。

③屋久島・口永良部島の子どもたちの交流を図るアカペラワークショップ

口永良部島には小中学校が一つずつあるが、総生徒数は約15名であり、生徒がいない学年や複式学級あるいは飛び複式学級を導入している小規模校である。しかし避難生活を送る子ども達は、屋久島の1クラス40人規模のクラスに応急処置的に通学しており、彼らの交流を狙いとしたアカペラワークショップを開催。12名の児童・生徒が参加し、小学校の教員数名と一緒にアカペラ演奏と演奏体験を楽しんだ。

・事前の活動

8月2日 アカペラ練習&ミーティング

8月3日 アカペラ練習&ミーティング

8月16日 アカペラ練習&ミーティング

・屋久島での活動行程

	午前	午後
8月11日~18日	島民ヒアリング、日程の確定、会場設定、チラシ作成、告知（富永）	
8月19日	他メンバー到着	練習
8月20日	会場見学、仮設住宅見学	練習、屋久島の方へホームコンサート
8月21日	宮浦小学校WS実施	ペンションにてミニコンサート、避難住民の方と対話、練習
8月22日	練習	仮設住宅コンサート、屋久島ベースコンサート
8月23日	帰京	

・事後の活動

10月10日 反省会&フィードバック共有

■考察と成果

・アカペラの普及

アカペラ演奏は大変高評価であり、宮浦小学校のワークショップでは児童・生徒より「とても楽しかった」との意見があった。また教員より「来年もできれば開催して欲しい」との依頼も出ている。口永良部島・屋久島の両方の島民から、「次は夏

祭りややるべき」との意見もあり、アカペラの魅力をしっかりと伝え、理解してもらうことができた。終了後の懇親会では島民がギターやカラオケを使用して歌を披露する双方向的な交流もあり、「歌」を媒介として都市部の学生と島民が交流する礎を築くことができた。

・非言語的コミュニケーションの発生

事後のヒアリングで、仮設住宅での演奏の感想を聞いたときに、「日頃の生活では懸命な様子ばかりみているが、アカペラ演奏を聴いて感涙している様子を見て、普段は気づけない島民同士の感情を共有できた。」といった意見があり、コミュニケーションの創出を生むことができた。

・マスメディアへの発信

以下の写真の通り、新聞に掲載され、口永良部島の支援コミュニティの結束を発信することができた。

■成果の活用方針

1.アカペラ演奏の空間設計の質の向上

本団体では地域行事や病院など多数渉外活動を行っているが、その価値の体系化は進んでいない。【演奏者一聞き手】だけでなく【聞き手一聞き手】同士のコミュニケーションに深化をもたらすことが分かったので、それを元に、コミュニティにとって効果的な演奏のあり方は何か、今後の渉外活動に活かす。今回の活動は会場設営・演奏練習・告知などで改善点も多く、よりインタラクティブなやり取りを盛り込むなどの工夫により、ゲストの充実度が増す余地が大きく残っていた。「歌を通して感動を届ける」という本団体の目的に向けて精進する。

2.口永良部島における交流の持続

口永良部島でのサークル活動は稀であり、島民にとって学生との交流・音楽体験は大学のイメージを身近に感じることでできる貴重な機会となる。また学生にとっても屋久島・口永良部島の人々・暮らしを体感することは都市部との差異に学びが多い。アカペラを切り口として学生と島民が交流を続けるきっかけとなった。

9月1日 読売新聞

8月29日 南日本新聞



参考写真

(宮浦小学校音楽室・仮設住宅談話室・屋久島ベース・宮浦小学校WSチャラシ)

